

トークセッション 農林水産資源の宝庫・ 愛媛の産業と地域づくり

臨時研究員 徳永真菜美



昨年に引き続き、「農林水産資源と地域づくり」をテーマにトークセッションを開催しました。今年は、趣向を変えて、地域づくり人養成講座(当センター主催)と地域マネジメントスキル修得講座(愛媛大学農学部農山漁村地域マネジメント特別コース主催)の受講生が、それぞれの講座を受けた中で感じたことなどについて報告を行い、住みよい地域づくりについて、多くの人の視点を交えてトークセッションを行いました。

今回のトークセッションでは、舞台に乗らないほどの出演者と150名の来場者によって、農・林・水産それぞれの現状の厳しさや魅力、地域づくりがどうあるべきか等について、活発な本音のぶつかり合いが繰り広げられました。アンケート結果では、「地域づくり」と農林水産業がつながる気がした」という声もあり、大変意義のあった会になりました。

近代化のなかで
忘れられていること

会は、笠松先生の講演から始まりまし



た。かつて農山漁村は、その地域が持つ農林水産資源の生産力・生産量には上限があり、その最大量を守っていく社会であり、かつ、人々はそれを最大限に使う知恵や技を持っていました。しかし近代以降、輸入が進み、石油・石炭などの地下資源によって、環境の制約をとりはらうことが可能になりました。生産の自由を手にした人々は、収益を追い求めていくようになったのです。

このような近代化の進展により地域が発展した点は否定できませんが、地域

がもっていた地域性からは乖離していったのです。私たちの暮らしの足下である地域はこのままでいいのでしょうか。

笠松先生が地域社会と仕事をつくりなおす4つの視点を提案されました。それは、①資源生産力を最大限に活かす知恵を見直す②新たな基礎コミュニティ「小さな自治」を創出する③都市との交流を進め、新たな人材を受け入れる④農山漁村でエネルギー

■基調講演『地域づくりと農林水産業』

講師：笠松浩樹

(愛媛大学農学部講師)

■特別報告 《修得講座》

- ・あすも 山下由美氏
- ・お米のファーム 坂本憲俊氏

《養成講座》

- ・今治市桜井公民館 青野信久氏
- ・大洲市大和公民館 丸田佳代子氏

■トークセッション

【コーディネーター】

- ・森賀盾雄(愛媛大学農学部教授)
- ・須山広周(ECPR)

【パネリスト】

- 《修得講座》
- ・池田広美氏(ミーティン・クラフト)
- ・高橋時英氏(八幡浜市職員)
- ・難波江任氏(NPO法人eワーク愛媛)

- ・西窪勇氏(愛媛県職員)
- ・森智子氏(森のともだち農園)
- ・川原真奈美氏(村上農園)
- ・西山敬三氏(市民農園アドバイザー)
- 《養成講座》
- ・稲垣謙三氏(西予市職員)
- ・川上修一氏(愛媛県職員)
- ・喜安恒賀氏(愛媛県社協職員)
- ・徳永吉和氏(大洲市職員)
- ・徳永真菜美(ECPR)
- 【アドバイザー】
- ・前田眞氏(邑都計画研究所)
- ・土井利彦氏(地域プランナー)
- ・富田敏氏(伊予市地域おこし協力隊)
- ・鈴木茂氏(松山大学経済学部教授)
- ・小田清隆(愛媛大学農学部准教授)
- ・香月敏孝(愛媛大学農学部准教授)
- ・鶴見武道(愛媛大学農学部客員教授)
- ・大西信治(ECPR)

を生産する。これらの地域に根ざした視点で、地域づくりを考えてみたいと思います。

愛媛の農林水産業

受講生による報告の後のトークセッションでは、笠松先生の講演を踏まえて、多様な議論を重ねました。

まずは、森賀先生や農林水産業に関わっている方々が愛媛の現状を話しました。愛媛の農林水産資源の宝庫と言えば、やはり美味しい魚(タイ、ブリ等)、果物(柑橘類、キウイフルーツ等)です。林業で言えば、森林面積が広く、ヒノキは全国トップです。一方で、耕作放棄地の占有率も高いという問題が潜んでいます。また、資源を活かして加工し、直売所などで販売することは、全国的に盛んなようです。



今回のセッションには、多くの農林水産業従事者が来てくださいました。農林水産業の現場は厳しいと耳にすることはありますが、その生の声があり、その生きた声から来てくださった漁師の方は、「苦しい状況は変わりません」と、山間地域で農業をされている方は、「私どもの地域はつぶれようとしています」と本音を話してくださいました。この言葉がすべてではありませんが、危機感を持

つ必要を感じました。

私たちは、この現状を、農林水産業に携わっている人々だけに任せておいていいのでしょうか。

「役割分担」と「つながり」

現状を変えていくためには、「役割分担」と「つながり」が必要ではという意見が続々と出ました。この2つは、一見、相対するもののように見えますが、農林水産資源を活かした地域づくりを進めるにあたって、とても大事な視点でした。まずは、第一産業の担い手には良いものを生産することに専念してもらうため、PRや販売をする役割を分担することで、成功している人がいました。そうすると、欲しい消費者に欲しいものが届くのです。また、高齢者や障がい者の方々などは福祉の分野に関わるだけでなく、自然がある畑で働くことで生きがいを見つけたという事実もあります。さらに、楽しいことをしたい人、田舎にはない経験をもった人、若さを活かして頑張っている人など、現在は多面的な価値観を持ちながらも、ゆるやかに連帯しつつ、愛媛県全体の向上を主体的に考えることができる時代なのです。もちろん、大きなことはできなくても、地元のものを買うだけでも、地域の役割を果たしています。農林水産業は一部の人だけでなく、もっと広がりをもつ可能性を秘めていることが分かりました。



大地を活かした地域づくり

トークを通じて、近代化によって忘れられていた地域が持つ「大地の力」を活かした農林水産資源に立ち返ることができました。本来、移動不可能であるその地域の大地が持つ力を活かすことは、農林水産資源を活かし、その業を盛んにすることです。その広がり、地域独自の文化、景観、伝統を生んだのです。

忘れられかけている農林水産資源と地域性を、

私たちが主体的につながらりながら紡いでいくことが、地域を元気にすることの始まりではないでしょうか。

トークセッションで出た印象的な言葉がありました。「農業をやっていると、人と町に関わることで多くなってくる」。その後が続いた言葉は、「人と町に関わっていると、地域のなかでの役割を考えるようになってくる」。

農林水産業と地域づくりが循環し、支えあっていることに気づかされました。

今回のトークセッションを契機として、参加者の方々それぞれがいま一度、自分たちの住む地域を多様な人々のネットワークの中で見直し、住みよい地域づくりにつながっていただきたいと思います。

